

地域医療を考えるペガサス情報誌



「つばさ」
創刊は第7回中野区において
最も優秀であったことを認め
特記マークを贈ります
PAPD法人は社会医療法人ペガサス

特集 1

ペガサスの原点、 カタチを変え新たなる挑戦を。

介護療養型老人保健施設「エクウス」と馬場満記念クリニックの誕生



TSUBASA



PEGASUS

へがサスの原点、 カタチを変え新たな挑戦を。

介護療養型老人保健施設「エクウス」と馬場満記念クリニックの誕生

昭和52年から地域の方々に親しまれてきた馬場病院は、平成23年8月、その長い歴史に幕を下ろし、

介護療養型老人保健施設「エクウス」と馬場満記念クリニックに生まれ変わります。

なお、病院に併設されていたへがサスケアプランセンター和泉、

へがサス訪問看護ステーション和泉、へがサスデイケアセンター和泉、

へがサスいきいきネット相談支援センターはそのまま機能が受け継がれます。

介護施設＋クリニック＋在宅支援事業所という、複合的なサービス機能を併せ持つ拠点へ。

馬場病院はへがサスの原点である和泉市上町で、

よりパワーアップした在宅支援ユニットを組み、新たな一歩を踏み出します。

この背景には、救急医療を使命とし、法人内の機能の分化と連携を進めることで、

「救急・急性期から在宅療養までずっと患者さまを支え続ける」ことをめざす

へがサスグループの変わらない信念があります。

「つばさ」38号では、馬場病院のリニューアル事業に焦点をあて、

スタッフたちの熱い思いをレポートします。

馬場満の心を受け継ぎ、新しい時代へ。

馬場病院の創設者・初代院長、脳外科医馬場満。「馬場満先生にお世話になった」と言ってくださる地域の方々は数多く、在りし日の思い出は今も院内で語り継がれている。馬場満とはどんな人物だったのだろうか。まずは、そこから話を始めよう。

馬場病院の「名前がなくなる寂しさ」。

施設のオープンまであと3カ月足らずという馬場病院を訪ねると、工事車両が行き交う慌ただしさがあるものの、院内は普段通りの穏やかな空気が流れていた。スタッフたちに話を聞いてみると、「きれいな施設になるのはうれしいけれど、馬場病院の名前がなくなるのは寂しい」と口を揃える。

二十数年前から勤務している看護師の原田裕子は、馬場病院を初め

て訪れたときのことを懐かしそうに語る。

「近くに住んでいたの、子どもの頃から忙しそうな病院だなと思っていた。私が中学生のとき、母が入院してお見舞いに来たこともありません。そのとき、にこにこして笑顔でジュースを手渡してくれたのが馬場満先生でした。あの笑顔は、今も忘れられません」。

馬場病院の看護師長・藤田佳子

も、馬場満との初対面を鮮明に覚えていてという。「馬場記念病院に入職して間もない頃でした。ご挨拶したら、目を細めて相好を崩し、**「がんばってくださいね」**と声をかけてくださいました。今でも満先生を思い出すと、笑っている顔しか浮かばないですね」。

患者さまはもちろん、職員に対しても、いつもやさしい笑顔で接していた馬場満。その温和な人柄から、



周囲の人々みんなに慕われていたという。

患者さま一筋に生き抜いた、馬場満。

ここで少し馬場病院の歴史をひもといてみよう。前身は昭和28年、大阪市西成区で開設された馬場医院である。下町の小さな診療所で、馬場満は懸命に診療に従事した。

やがて昭和52年、馬場満は現在地である和泉市上町に馬場病院を

開設した。当初、馬場病院は脳外科を中心とする病院で、周辺になかった脳外科疾患を診る病院として、瞬く間に地域になくはならない存在となった。

ここでも馬場満は時間を惜しまず、身を投げ打って献身的に働いた。馬場病院には、朝日が昇る頃から



診察を待つ患者さまが並び、救急車がひっきりなしに訪れ、深夜まで煌々とあかりが灯っていた。当時をよく知る看護師の原田は語る。

「だいたい朝9時から午前診が始まり、終わるのは夕方の5時頃。それからお昼ご飯を食べて、午後診が午後6時から始まり、すべての診察が終わるのは11時くらいでした。その合間に救急搬送も次々とあつて、手術もあります。満先生の回診が夜中にずれ込むことも珍しくありませんでした」。

また、馬場 満の姉であり、馬場病院の開設当初から事務職として働いてきた馬場美和は言う。「ある



とき、救急搬送が7台続いたことがあつたんです。それで、8台目の救急搬送の依頼があつて、私はもう無理だろうと判断して断りました。そのことを院長に事後報告したら、なんで断るんや、患者さんは苦しんでるんやないか」と激怒されたことを覚えています」。

馬場美和も、「とにかく診察が丁寧で、患者さまにやさしい人でした。馬場先生に頭を触ってもらっただけで、痛みが治った」なんていう患者さまもおられ、私はそんなばかなことはないだろうと笑っていたんです。それだけ患者さまの信頼も厚く、みんなに好かれていたと思います。今でも、馬場病院からタクシーに乗ると、馬場先生は本当にすごい人でしたねえ、と言われたりし



馬場 満はほぼ毎日病院に寝泊まりし、治療にあたっていた。しかし、その疲れをみじんも感じさせないほど、周囲にはやさしく温かく接していた。原田は言う。「患者さまにもご家族にもすごく誠実でした。ご家族が、もう一度説明を聞きたいと言われてもいやな顔ひとつせず、丁寧に説明していました。先生の口から不満なんて聞いたことがありません」。



ます」と笑う。

後年、馬場 満は体調を崩し、自らも病と闘うようになる。そんな状況になつても、点滴をしながら、入院患者さまの病床を回診した。そこには、ただひたすら患者さまのためにすべてを捧げた医師の姿があつた。

看護師長の藤田は言う。「患者さま中心で考えなさい」というのは、満先生が言い続けてきたことですが、それがすべての原点だと思います。その満先生の教えは、私たちの心に生きていますし、これからも変えたくありません」。

馬場 満の教えを受け継いでいく。

「脳外科の馬場」と言われた伝統の継承。

馬場病院の入り口前に据えられた、馬場 満の銅像。その穏やかな表情を万感の思いで見つめるのは、社会医療法人ペガサス 理事長の馬場武彦である。

「馬場病院がいよいよ役目を終えることになり、最近、よく父のことを思い出します。とはいえ、幼い頃、父は診療に追われ、ほとんど家にいませんでしたから、父子の関係は希薄でしたね。思い出と言え、須磨の水族館に連れていってもらったことぐらいで」と、苦笑する。

馬場が父、馬場 満の存在をとくに意識し出したのは、九州大学医学部に進んでからだという。「夏休みなどで帰省した際、しばしば父に会いに馬場病院を訪ねました。そこ

で見たのは、患者さまのために身を粉にして働く父の姿でした。診察が終わるのを待っていたら夜中になり、ようやく「おつかれさま」と、ビールを酌み交わしたものです。本当によく働くなあ、と頭が下がる思いで、同じ医師をめざす者として素直に尊敬の念を抱きました」。

馬場はその後、大学を卒業し、九州大学医学部附属病院（現・九州大学病院）の脳神経外科で医師としての第一歩を踏み出す。「大阪に帰るつもりは毛頭なかった」という馬場だが、約10年後、父から「帰ってきてほしい」と連絡が入り、戻ることになった。そんな馬場を待つていたのは、想像を超える借金だった。「父は採算を度外視して、当時の



最高の性能をもつ先端医療機器を次々と導入していました。法人ではなく、個人病院だったこともあり、経営的には非常に苦しい状況だったんです」と、当時を振り返る。

馬場は意を決し、若いエネルギーのすべてを、病院組織の改革に注ぎ込み、今日の社会医療法人ペガサスを作り上げてきたのである。「父は確かにすごい人でしたが、誰もが父と同じようにできるわけではありませんが、すべてを犠牲にするというのは、時代に即したカタチではないように思いました。個人ではなく、組織で対応する。そのことで継続的に良質な医療を、提供することができるよう力を注いだのです」と話す。

だが、その険しい改革の道のりにおいても、馬場 満に対する尊敬の念は少しも揺らぐことはなかったという。「父は晩年C型肝炎を発症し、肝臓がんで他界しました。それは外科医として、言わば『名誉の戦死』とも言えるべき人生の幕引きだったと思います。医療にすべてを捧げた父のことを、今でも誇りに思っています」とほほえむ。

今回、馬場病院の外來機能を引き継ぐクリニックに、馬場 満の名前を冠したのも、一つには「先代の診療理念を継承する象徴的なもの」として、永続させていきたいという思いがあつたからに他ならない。「脳外科の馬場」として地域に根ざしてきた伝統を、馬場はこれからも守っていく心構えだ。

地域にこれまでなかった在宅医療のカたちをつくりたい。

馬場病院から、介護療養型老人保健施設、高度外来機能のクリニックへ。その転換は新たな在宅の拠点づくりである。現場のスタッフたちは胸に大きな期待を抱き、準備を進めてきた。準備に関わる職員たちの活動を追った。

昨年から本格的に動き出したプロジェクト。

昨秋のある日、馬場病院の食堂に、エクウス開設準備室のメンバーが集まっていた。

テーブルの上には、設計会社から届いた新しい施設の図面が広げられていた。あらかじめリクエストしていた通り、トイレや洗面所への動線には、車椅子の患者さまのための緩やかなスロープが描かれていた。病室も通路も浴室も、スペースが広くゆとりとつてある。「ゆとりがあるねえ」「バルコニーもある」。図面をのぞき込むメンバーは口々に感想を述べ合い、しばし盛り上がった。

「身障者用トイレは、もう少し診察室に近い方がいいんじゃないかしら」。そんな指摘もあり、設計会社に設計の部分修正を相談すること

を決めた。そのほか、建て替えに向けての細々とした役割分担などを決め、この日の委員会は閉会した。

準備室のメンバーは、馬場病院の新田敦範医師を中心に、看護師、理学療法士、薬剤師、管理栄養士、事務職員などで構成され、それにプロジェクトの責任者である社会医療法人ペガサス・法人本部企画運営局長の田中恭子（馬場記念病院・事務部長）が加わる。この準備委員会は、毎月1回、定期的に開催されているものだ。



老朽化した施設をなんとかしなくては…。

馬場病院のリニューアル構想が生まれたのはかなり以前からだ、田中と言う。「何年も前から馬場病院の老朽化が問題になっていて、機能の見直しを始めていたんです。そんな折り、平成23年度末で介護型療養病床が全廃される」という方針が厚生労働省から発表されました。馬場病院は全60床のうち、40床が介護型療養病床です。今ある医療・介護サービス機能をできるだけ継続するにはどうすれば良いだろうか。その結論が、介護療養型老人保健施設への転換でした。

療養病床には医療保険から費用が賄われる医療型（25万床）と、介護保険から支払われる介護型（13万床）がある。これら38万床ある療養病床を大幅に削減し、入院治療が必要な人に絞って医療型に一本化することが、平成18年6月に成立した医療制度改革に盛り込まれたのである。（「ウェブ版知恵蔵2011」より）

この療養病床再編計画は医療費の抑制を目的とするものだが、その後、政権交代などにより、介護療養病床の廃止は平成29年度末まで先送りされることになった。（平成23年6月現在）

このまま介護型療養病床が廃止されれば、地域全体で慢性期の患者さまを受け入れる施設が大幅に減る。そのことを第一に考え、ペガサスは患者さまの受け皿を用意するために、いち早く介護療養型老人保健施設への転換を決意したのである。

医療必要度の高い方が安心して入れる施設を。

介護療養型老人保健施設とは従来の介護老人保健施設とは異なり、より充実した医療サービスを提供できる介護施設で、新型老健とも言われている。たとえば、痰の吸引の必要な方、胃ろうを造設されている方など、一定の医療管理の必要な方にも安心して入っていただくことができる。ペガサスでは、平成21年に「ペルセウス」を開設し、今回が二施設目となる。

「ペルセウスで培ったノウハウを活かし、医療必要度の高い方の在宅復帰を積極的に支援していきたい」と、田中は期待を込める。一方、馬場満記念クリニックについては、こんな

介護療養型老人保健施設「ペルセウス」

平成21年10月、馬場記念病院の隣地に開設された、ペガサス初の介護療養型老人保健施設。ペガサスリハビリテーション病院の介護型療養病床を引き継ぎ、必要な医療を提供しつつ、十分な介護サービスと充実したリハビリテーションを提供。馬場記念病院の救急医療を支える後方施設として機能している。



思いを寄せる。「病院の建て替えに先立ち、地域の方たちと何度か膝を交えて語り合うなかで、改めて馬場病院の果たしてきた役割の大きさを強く感じました。この場所はペガサスの原点であり、私たち職員心の拠り所です。法人のシンボルと



して、病院の外来機能を馬場満記念クリニックというカタチで、継承していくべきだと強く思いました」。

馬場病院・事務長代理の高橋伸行も、田中と同じ思いを抱く。「地域の方のなかには、以前、馬場満先生に診てもらい、とても良くしてもらいました」と言う方もいらつやいます。それだけ馬場病院がこの地に根づいていたわけですし、これからもみんなに慕われる施設にしたいですね」。





新型老健を創造していく気構え。

介護療養型老人保健施設「エクウス」の施設長、そして、馬場満記念クリニックの院長に就任するのは、現在、馬場病院に勤務しており、昨年3月まで馬場記念病院で外科部長職を担っていた新田医師である。

新田医師は「エクウス」への抱負をこう語る。「新型老健は一般に、介護療養病床と従来の介護老人保健施設の間で位置づけられます。でも、診療や看護、介護に中間という区切りはありません。新しい役割を担う施設を創造していく、という心づもりです」。

エクウスは、ペルセウスと同様、医療ニーズの高い方を受け入れていく。万一の急変時は、速やかに馬場記念病院へ搬送する計画だ。

さらに新田医師は、長年外科医として培ってきたノウハウを発揮していきたいと意欲を燃やす。「外科の仕事のなかで重要とされるものの一つに、感染対策があります。たとえば肺炎の患者さまを診るとき、一般的な肺炎なのか、院内感染による肺炎なのか見極めるためのトレーニングを外科医は受けています。ですから、感染予防や感染症治療においては、万全の体制で臨めると自



負しています。また、これまで胃ろう造設も数多く手がけた経験から、胃ろう管理にもきめ細かく目配りできます。常駐する管理栄養士と相談しながら、入所される方にとって過不足のない栄養投与と安全管理を心がけていきたいですね」。

組織づくりの面で新田医師が掲げるキーワードは「協働」である。「初めて馬場病院に来たとき、施設はレトロだけど診療・看護は古くて遅れているわけではなく、患者さまへのやさしさがあふれている、と感じました。その良さを受け継ぎつつ、スタッフ個々が職種を超えて心と力を合わせ、助け合って仕事していくような組織を作っていきたいと考えています」。

療養環境の向上に大きな期待。

「施設が新しくなり、療養環境

が改善されるのが楽しみ」と語るのは、引き続きエクウスと馬場満記念クリニックの看護部門の統括役を担う、看護師長の藤田である。「エクウスは病室も通路も広く、ストレッチャーでの移動もらくにできます。また、寝たままでお風呂に入っていたことができるなど、アメニティは飛躍的に向上します。これまでの古い施設と違い、快適に療養してい

ただけるでしょう」。

確かに馬場病院は老朽化が進み、壁や床、階段なども古びている。そうしたハード面の改善は、スタッフみんなの喜びと言える。また、エクウスでは施設転換のメリットを活かし、レクリエーションに力を入れていくことも計画している。「自分の家と思ってもらえるような、心地いい生活空間にしていきたい」と藤田はイメージをふくらませている。

在宅復帰への道をしっかりサポート。

エクウスの入所期間は、約2カ月。その60日間を有効に使って、いかに在宅へ橋渡しできるかが大切なポイントとなる。退所後の相談に応えるのは、医療ソーシャルワーカー（医療福祉相談員）の丸山秀幸（医療福祉相談室主任）である。

「自宅に帰りたいというご本人、ご家族には、ペガサスが全面的にバックアップすることをお伝えしていこうと思います。法人内には在宅療養を支援するさまざまな事業所が揃っていますし、引き続き、必要な医療と介護サービスを提供することができます。また、その後も、ご

家族が介護に疲れたら、ショートステイとして再びエクウスを利用していただけますし、ずっと見守っていくことができます」。

また、丸山は法人全体におけるエクウスの役割も常に念頭に置いている。「ペガサス全体の中で考えれば、



馬場記念病院で救急患者さまを受け入れるための後方施設としての役割を持ちます。救急患者さまを一人でも多く受け入れるために、患者さまに適切なステージへ移っていたり、ただかなくてはなりません。エクウスのご利用者に、そういう事情も説明させていただくつもりです。もちろんそれとは別軸として、和泉市上町など周辺地域で、在宅療養されている方のショートステイや入所も受けれます。ぜひご利用いただきましたと思います」と言う。

在宅への橋渡しという側面で、重要な役割を担うのがリハビリテーションである。エクウスとクリニックでは、理学療法士2名を配置し、リハビリテーションに力を注いでいく。



理学療法士の浅野賀生（リハビリテーション部副主任）は「リハビリテーションにより、介助量の軽減が見えてきたら、自ずと在宅への希望が見えてきます」と話す。「たとえば立ち上がり訓練。おしりを持ち上げるのが大変だった人でも、自分である程度立ち上がれるようになれば、介助者もすごく楽になります。エクウスでは、ご本人はもちろん、お見

舞いにこれたご家族にも、こうすれば、力をそれほどかけなくてもラクに介助ができる」というアドバイ

スを積極的にしていきたいと思います」と抱負を語る。

専門医が高度な診療を行う、馬場満記念クリニック。

一方、馬場病院の外來機能を引き続き馬場満記念クリニックについて

も、スタッフ一同並々ならぬ意気込みで臨む構えだ。診療では院長の新



田医師のほか、専門医が日替わりで担当し、内科、外科、脳神経外科、整形外科、(脳)神経内科、形成外科、循環器内科の多岐にわたりハイレベルの診療を行う。

院長の新田医師は語る。「個人的には、馬場記念病院の外來の一部が、ここ和泉市上町にある、というイメージをもっています。特徴としては、風邪などの急性症状に対応する一般診療外來と、専門外來の二つの機能を有していることがあげられます。月曜日から金曜日まで、脳神経外科をはじめ、各専門分野

午後診でも受けることができる外來リハビリテーション。

新田医師は、もう一つの特徴として「外來リハビリテーションの充実」をあげる。「午前診はもちろん、午後診も理学療法士によるリハビリテーションを提供していく予定です。必要な患者さまには、温熱療法や牽引療法だけでなく、理学療法士が積極的にリハビリテーションを行っています」。

たとえば、慢性的な腰痛では、理学療法士の指導のもとで、筋力の強化や関節の動きを改善する運動を継続的に行うことにより、腰痛をうまくコントロールできるようにな

の医師が外來を担当し、高度な専門診療が可能となります。そして、しかるべき検査の後、急性期治療が必要であれば、直ちに馬場記念病院へ紹介することができます。また、反対に馬場記念病院で急性期治療を受けた方のその後の経過観察を行うケースもあるでしょう」。

大きな病院に足を運ばなくても、診療所で専門医の診療が受けられるメリットは、馬場満記念クリニックならではの大きな特徴となりそう

る。理学療法士の浅野も外來業務に意欲を燃やす。「痛みを緩和するだけでなく、生活上でどんな動作に不便を感じておられるのかを充分にお聞きした上で目標を設定し、快適に生活できるようサポートしていきたいですね」。

馬場満記念クリニックでは、午後診を18時から19時と遅めに設定している。これは、仕事帰りの方も利用しやすいように配慮したもの。診療はもちろん、リハビリテーションを必要とする方々のニーズに幅広く応えていく方針だ。

複数の機能を併せた組織力で、地域のニーズに応える。

ペガサスの在宅医療への思いが大きく込められた、エクウスと馬場満記念クリニック。だがこの二つだけでは「点」の存在である。ここを基軸にして、大きく「面」展開を果たしてこそ、地域のニーズに応えることができる。ではどうするか…。そこでのキーワードは「組織力」だ。

点から面へ。

地域の在宅療養を幅広く支援。

和泉の拠点を語るときに欠かせないのが、在宅医療・介護を支援する併設事業所である。「ペガサスケアプランセンター和泉」「ペガサス訪問看護ステーション和泉」「ペガサスデイケアセンター和泉」の三つがあり、「ペガサスいきいきネット相談支援センター」も開設している。事業所がカバーするエリアは少しずつ異なるが、主に和泉市、高石市を中心に、在宅で療養を続けるご本人とご家族を支えている。

ペガサスデイケアセンター和泉の管理者・福嶋茂喜は、馬場記念病院での急性期、回復期、そしてデイケアセンターでのリハビリテーションを経験してきた。福嶋は、デイケアセンターに異動してから退院後の継続したりリハビリテーションの重要性を



感じたと言う。

「たとえば、退院時は車椅子で、四点杖の歩行介助あり。でようやく歩ける状態だった患者さまが、今では一本杖で屋外を、家の中であれば杖なしで歩いていらつしやる。そういう姿を見ると、デイケアのやりがいを感じますね。退院後も諦めることなく訓練を続けることで、動作の不自由さはかなり改善できると思います」。

地域へ積極的に出ていく福祉活動。

和泉の拠点で特徴的なのが、「ペガサスいきいきネット相談支援センター」だろう。いきいきネット相談支援センターは、地域住民を対象にした福祉のなんでも相談窓口である。これは大阪府が地域のセーフティネット体制づくりの一環として進めている事業で、ペガサスでは和泉市の委託を受けて、平成20年から信太中学校区を担当している。

センターの業務を担うのは、コミュニティ・ソーシャルワーカー（地域福



祉総合相談員）の前田志帆（医療福祉相談室所属）である。「この業務を始めた頃は、まずこういう相談窓口があることを知っていたために、高齢者の集いなど地域の活動にどんどん顔を出し、私自身を知ってもらおうよう努力しました」。そうした努力が実り、今では、実にさまざまな相談ごとが前田のもとに持ち込まれる。たとえば、息子の虐待から逃れてきた女性や、認知症の一人暮らしの方の生活支援から、ご近所付き合いの困りごとまで、サポートする内容は多岐に及ぶ。福祉分野では、さまざまな法律や制度が整備されているが、それらの狭間において、困っている人を見つめ、問題を解決していくのである。

地域のニーズを捉え、 絆を深めていく。

前田の活動は、その他の事業所のスタッフにも地域との絆を深めるきっかけを与えている。たとえば、ペガサス訪問看護ステーション和泉では、日常の訪問看護活動のほか、元気な高齢者の健康づくりに役立つボランティア活動を行っている。



所長の阿武（あんの）美穂子は言う。「ご高齢者が定期的に集まるお食事会があるんだけど、そこで何か健康情報を提供できないだろうか。そんな前田の相談をきっかけに、毎月1回お食事会に向いて、血圧測定させてもらったり、健康相談にお応えしたりしています。おかげで、この地域の方々といっそう交流が深まり、訪問の途中で歩いていると、ペガサスさん」と声をかけられることも増えています」とほえむ。

ペガサスケアプランセンター和泉の所長であり、ケアマネジャー（介護支援専門員）の松阪恵はこんなケー

スを挙げる。「前田の相談を受けて、一人暮らしのご高齢者のご自宅に同行し、介護保険の申請のお手伝いをすることもあります。誰かが地域のニーズをキャッチして、それを適切な人につないでいく。そういう仕組みが自然とできあがっているのが、この良さだと思います」。



地域の医療・介護・福祉を トータルに支える。

併設事業所の面々も、エクウスの誕生を心待ちにしている。阿武は言う。「馬場病院が地域の方々に親しまれてきたように、エクウスもみんなに愛される施設になればいいな、と期待しています。ここに来れば、在宅についてもいろいろ支援できます。そのことをもつと広く知っていただきたいですね」。

松阪は、ショートステイの活用に期待を寄せる。「最近、家での看取りを希望する方が増えていますが、看取りに至るまでは体の変化がいろいろ出てきます。いつ急変するかわからない怖さのなかで、ご家族も精神的に疲れてしまうんですね。そんなときに、エクウスを上手に利用して、家族の方がうまく休息をとれたいいな、と思います」。

エクウスなら、重症を除けば、医療ニーズの高い人も安心して引き受ける体制が作られている。さらに、急変時は馬場記念病院が全面的に支援する体制だ。エクウスと馬場満記念クリニック、さらに在宅介護を支援する併設事業所のネットワーク。「和泉在宅支援ユニット」はこれら複合的なサービスを提供する体制を整え、馬場記念病院と連携しながら、地域の医療・介護・福祉をトータルに支えていくこうとしている。



法人内の機能分化と連携。 その先に描く。ペガサスの未来。

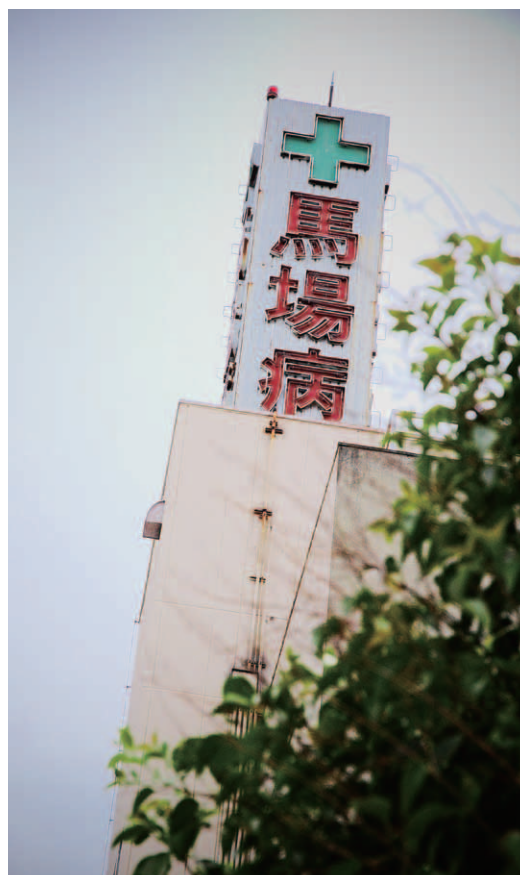
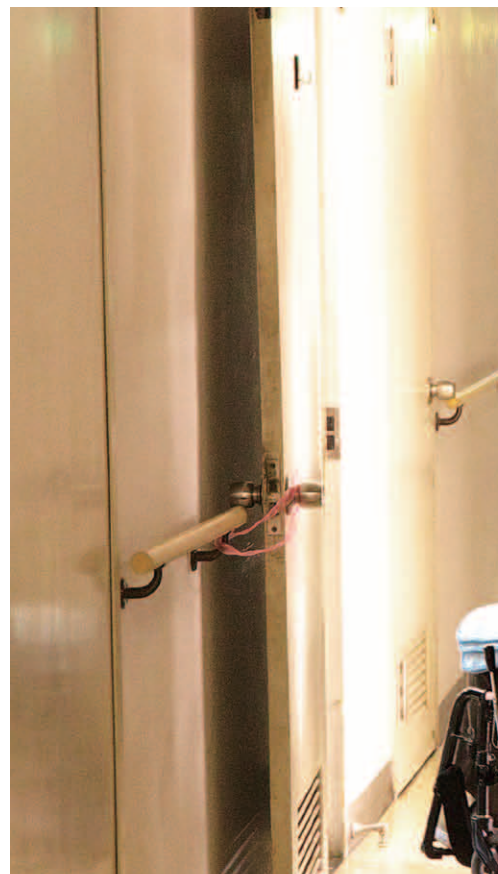
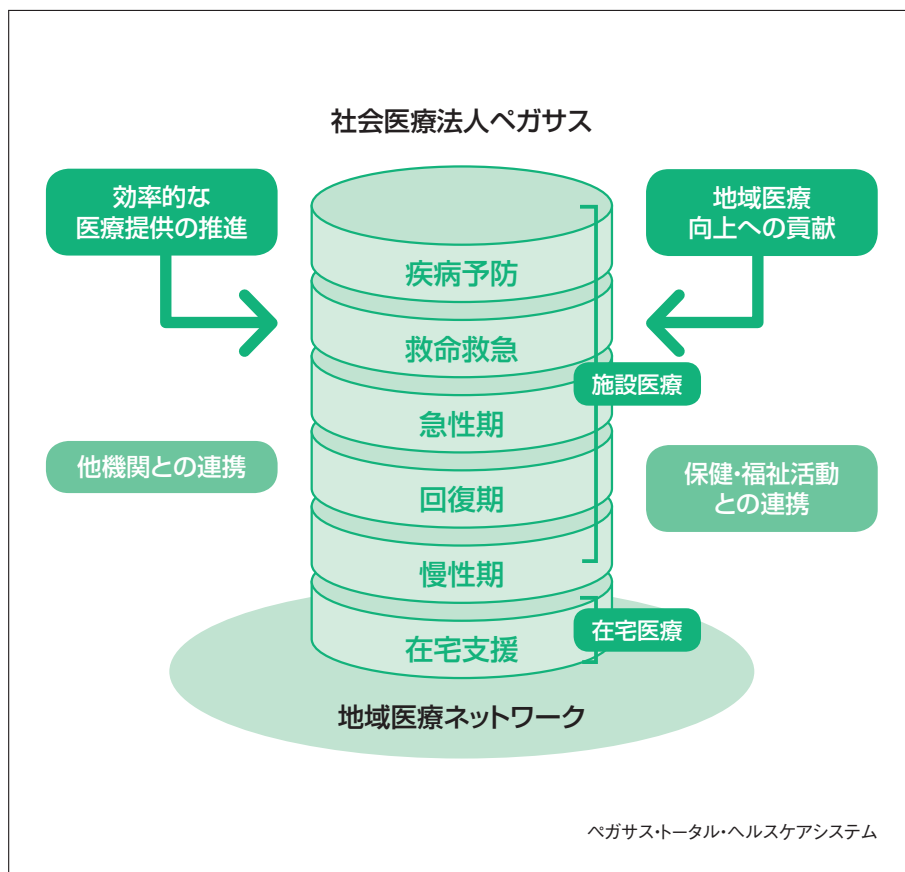
ペガサスの原点といえる場所で、新しく動き出そうとしている和泉の在宅支援拠点。社会医療法人ペガサスを率いる馬場武彦は、先代の思いを受け継ぐ一方で、組織のトップとして、明日の地域医療を見つめる。今回の事業転換の狙いについて、あらためて馬場に聞いた。

「法人全体を見渡したとき、まず中心に馬場記念病院があります。その上で、〃質を維持した効率的な医療の提供〃を目的に、新たな位置づけの介護施設＋高度診断機能を有する診療所＋在宅支援の事業所」

という、言わば〃和泉在宅支援ユニット〃を誕生させました。これをより良いカタチで、地域の医療機関や介護事業などの皆さまと結びつけていきたいと考えます」。

ペガサスではこれまでも、法人内で〃選択と集中〃を図り、馬場記念病院は急性期医療に特化し、馬場病院は療養期医療に専念するカタチをとってきた。その〃選択と集中〃をさらに突き詰め、法人内の機能を分化させることが、今回の事業展開の狙いだという。

「新しい和泉の拠点では、従来の



実質的な機能を維持しつつ、質の高い地域医療・介護サービスを提供していると考えています。病院での入院治療は実質的になくなり、エクウスに入所される方の急変時や、クリニックでより高度な検査や治療が必要と判断された場合は馬場記念病院が全面的にバックアップすることで補完できます」と、馬場は話す。

また、この背景には、高齢化の進展や疾病構造の変化といった時代の流れも大きく影響しているという。「これからは、患者さまへの継続ケアがますます重要になっていくはず。急性期医療を脱した患者さまには回復期、そして、療養期医療が必要になります。さらにその後、介護福祉施設や在宅療養へと、質の高い医療サービスを継続して提

供することが重要です。私たちは馬場記念病院を中核として、在宅支援に至るすべてを包括する地域医療ネットワーク「トータル・ヘルスケアシステム」の構築をめざしているのです」。

馬場がもう一つの柱に据えているのは、救命救急という社会医療法人ペガサスの使命である。「救命を決して断らない」ために、法人内で機能分化を進め、法人全体が有機的につながり、ネットワーク力を発揮していきたい。そのための新たな一歩だと考えています」。

地域の救急医療を堅持しつつ、医療・介護・福祉の広い分野で貢献をめざすペガサスグループ。その先に、馬場は地域の人々が安心して医療や介護サービスを受けられる豊かな未来を思い描く。

PEGASUS TSUBASA

特集 2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、
そして、看護、介護に関連する事業所と、連携を行っています。
診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。
丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、
患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。
看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。
ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、
快適な生活の場そのもののご提供により、皆さまを支援します。
特集2では、こうした診療所、事業所をご紹介します。

※ 診療所（アイウエオ順）そして事業所の順でご紹介しています。

地域連携を大切にして
住民の健康を守る。

「世のため、人のため」に
始めた在宅医療。

かとう鳳クリニックは、開院して
3年目。新しい院内は、明るく清
潔に整えられている。その待合室の
テレビを指し、「診察室から漏れる
僕の声があまりに大きいので、スタッ
フの要望で置くことになりました」
と元気に笑う加藤 聡院長。同クリ
ニックは内科・循環器内科・在宅医
療を標榜しているが、消化器内科や
外科、呼吸器外科でもキャリアを積
んできた加藤院長は、「大抵の病気
は診ることができます」と自信をの
ぞかせた。

同クリニックの診療時間は9時か
ら12時までと、17時から20時まで。
平日だけでなく、土・日曜日の午前
も診療を行う。午前と午後の診療
の間、13時から16時は在宅医療に
あてている。在宅医療には休みがな
く、土・日曜日も祝日も行っている。
「お休みが少ないですね？」と尋ね
ると、「休んでいたら在宅での看取
りはできませんから。それに、僕は

勤務医時代の思いからスタートした
在宅医療を休みなく毎日提供する。

診療所



この仕事が好きですから、苦にはな
りません」と明るい声が返ってきた。

加藤院長が在宅医療に興味を
持ったきっかけは、勤務医時代に、
在宅での療養に不安を抱いている高
齢者とその家族をたくさん見てきた
こと。「僕は、医療の仕事は『世の
ため、人のため』の仕事だと思っ
ています。困っている人を助けよう
と思ったら、自然と在宅医療にたどり
ついたんです」。

変化する地域医療に
対応するにはケースワーカーと
地域連携室が必需。

在宅医療は、加藤院長と看護師、
ケースワーカーの三人でチームを組ん
で行う。看護師は医療側のセッティ

ング、ケースワーカーは介護側のセッティングを担当している。同クリニックのように医師一人、看護師六人という規模で、ケースワーカーがいるところは少ない。加藤院長は「介護保険法を含めて、地域医療を取り巻く状況は絶えず変化しますから、在宅医療を行うには、ケースワーカーが絶対に必要です。船でいえば、航海士のような役割ですよ」と、その重要性について語る。

また、同クリニックには「地域連携室」がある。「『地域連携室』といっても、部屋もないし、ケースワーカーと事務職員の二人きりですけど」と加藤院長。地域連携室は、外来業務には携わらず、地域の医療機関との連携をしっかりと維持することに専念しているという。馬場記念病院との間でも、患者さまを紹介されたり、逆に同クリニックから患

者さまを紹介したり、と地域連携室は大活躍している。

「今後は、どうしたらこの地域の人をもっと元気になるか、を考えていきたいですね。それには、医療連携は欠かせません」と、自らの豊富を語るとともに、改めて地域医療のなかでの医療連携の重要性を強調した。



医療法人泉翔会 かとう鳳クリニック
院長：加藤 聡
所在地：堺市西区上 714-1 朝日医療ビル鳳南 2F
診療科目：内科・循環器内科、在宅医療
TEL：072-272-8811

「自然な流れ」に逆らわず、「患者さま」と「時代」に合わせた診療を提供する。

診療所

それを望む人がいるから、在宅医療にも力を注ぐ。

緑と歴史に包まれた町で診療を開始し29年目。

八星（やつぼし）内科クリニック

を東に進むと、堺市のシンボルパークともいえる大仙公園があり、その隣には古墳が広がる。緑と歴史に包まれたこの地に八星内科クリニックが開院したのは、今から29年前のこと。「高校までは堺市で過ごしていたので、開院するなら地元で」、そ

う話す八星元彦院長は、ゆつたりとした語り口が印象的だ。

診療のモットーを尋ねると、「良いことも悪いことも、自然の流れに任せて」という答えが返ってきた。良いこととは、患者さまの病状が良くなること。そして八星院長の言葉によれば、「良くなるのは患者さまの回復力のおかげであり、医療を用いて手を尽くしてさしあげるのも自然の流れのなかにある」という。こうした一連の流れのなかで八星院長にできることは、治療法や紹介先といった選択肢を的確に示すことと、治療の結果を患者さまに自然に受け入れていただくようにすること。無理にどうにかしようとしなない。「無理に何かをする」ということは、患者さまに大きな負担をかけることになりますから」。



今ある制度を活用し、患者さまに必要な医療を提供。

八星内科クリニックでは必要に応じて、患者さまに設備の整った病院を紹介する。特に馬場記念病院とは、深く連携しているという。取材当日には、長年、同クリニックに通っている患者さまが頭痛のために来院した、という連絡を馬場記念病院から受けたばかりだ。「馬場記念病院さんは、病状によって即入院手続きや検査をしていただけるのでありがたいです」と、病診連携について満足そうな表情を浮かべた。

また、同クリニックは24時間体制で訪問診療をする在宅療養支援診療所として届け出ており、居宅介護支援事業所も併設している。在宅医療に力を入れるようになったきっかけを尋ねると「国が、在宅医療を進め



八星内科クリニック
院長：八星 元彦
所在地：堺市堺区旭ヶ丘中町1-31-2 滝本ビル1F
診療科目：内科、消化器科、循環器科、放射線科、リハビリテーション科
TEL：072-244-6231

るという方針を打ち出し、病院側の機能もそれに向かって拡張されてきました。そのとき、目の前にそれを必要としている患者さまがいるとなれば、自然の流れで」と笑う。

八星院長が幾度となく口にする「自然の流れ」という言葉は、その奥に「患者さまのため」とか「患者さまに負担をかけないため」という意味

長年、訪問介護の事業に携わってきた経験を活かして開いた小さな事業所。

事業所

祖母への恩返しへの気持ちも含めて開業。

約60人のご利用者の名前も経緯もすべて頭にインプット。

古谷和子さんは、もともと社会福祉協議会の職員として訪問介護の事業に携わっていた。その後、知人が立ち上げた訪問介護事業を、古谷さんともう一人のスタッフが中心になって切り回していたという。そして平成14年、同社を開業するに至った。居宅介護支援事業と訪問介護事業、介護予防訪問介護（※）、が同社の事業内容だ。障害者自立支援法によるサービスとして、障害者の介助も行っている。

古谷さんが訪問介護にこだわり続

があるようだ。

最後に、今後の目標を聞いてみると、「患者さまは、世代も違えば、さまざまな個性の方がおられます。時代によっても変わります。どんな患者さまも私を信用し、病気をきちんと理解していただけるよう、人間の幅をつけて患者さまに対応できるようにしたいですね」と語ってくれた。

けるのは、「おばあちゃん子」で、お年寄りが好きだったから」というほかに、「ご自身が病気になるたときに祖母に世話をしてもらった恩返しの気持ちもあるという。『今では、私もお年寄りになってしまったから、ご利用者と『お友だち付き合ひ』ができるようになりました』と笑う。現在、ご利用者は約60人。その一人ひとりの名前から、その方たちの特徴・生活歴など、すべて古谷さんの頭に入っているという。「小さいがゆえの、メリットですね。職員同士、情報共有もしやすいですし」。

少人数のスタッフで社名のごとく和やかに和気あいあいと。

開業して1年経つ頃には、それまで介護とは関係のない仕事をしてい

たご主人を社長の座に引つ張ってきただ。ご主人は社長になったのを機に、介護福祉士の資格を取得している。現在、スタッフは古谷さんを含めてケアマネジャーが3人、常勤・非常勤・登録を含めてヘルパーが十数人と、いう体制で運営している。スタッフの採用面接をするときに、必ず尋ねるのが「お年寄りは好きですか？」ということ。好きだからこそ、優しさや思いやりの心で接することができると古谷さん。「小さい事業所だから、一人ひとりの思いが、大きく影響します。みんなが同じ思いであれば、サービスにもそれが表れると思います。社会に対する貢献度はわずかかもしれませんが、和みへのヘルパーさんにお世話になって、本当に良かったと思っていただけ、そんなお手伝いができればいいなと思います」。

しかし、現場では和やかなことは



かりは言っていられない、というのが現実だろう。「介護保険制度上の問題で、ご利用者の願いを受けられないという場合、それをご利用者に説明しても理解を得られない、ということもあります。そんなときには、スタッフに『たまつたストレスは事務所に戻ってから爆発させて』と言っています。『そのかわり、いったん訪問介護に出たら忘れてね』と」。

今後は、スタッフの健康面を気づかったり、楽しみを考えるなど、社内のことにも、もつと目を向けていきたいと付け足した。「少人数のスタッフですので、社名のように、和やかに和気あいあいと、仕事に誇りをもつてやっていきたいです」と、こやかに語ってくれた。

※介護予防訪問介護：介護予防を目的として要支援者の居宅を訪問し、介護や日常生活に必要な支援を行う。



有限会社 ケアフル 和（なごみ）

管理者：古谷治彦

所在地：堺市西区鳳南町 5-512

事業内容：居宅介護支援事業、訪問介護事業

TEL：072-260-0753



医療が変わります。 ペガサスも変わります。

地域医療を取り巻く環境は、変わり続けています。
その変化を見つめて、ペガサスでは、馬場記念病院を中心に、
さまざまな取り組みを行っています。
その取り組みの目的や方向性、また、
皆さまにご理解いただきたい点をお伝えします。

馬場記念病院では、随時、
検査装置の更新、検査環境の
充実を図っています。

心臓血管（冠動脈）の
精密検査を目的として、
X線CT装置を更新しました。

馬場記念病院では、平成23年7月、
シングルスライスX線CT（コンピュータ

断層撮影）装置を64列マルチスライスX
線CTに更新しました。現在稼働中の
16列MDCTと併せて2台体制になり、
今後はよりスムーズに検査をお受けいた
できます。

X線CT装置は、体にX線を照射し、
コンピュータ処理により体の輪切りの写
真を撮影するものです。今回導入の装
置では、1回の線源の回転で64の断層像
を撮影し、さらに短時間で解像度の高
い画像を広範囲に得ることができます。

このX線CT装置では、心臓および
冠動脈の精密検査が可能です。冠動脈
の狭くなっている部分、その狭窄の度合
い、あるいは血管の走行などを詳しく
知ることができます。すなわち、心臓・
冠動脈がどのような状態にあるかを、
鮮明な断層像や立体像で表示すること
で、心筋梗塞や狭心症、不整脈などの
心疾患に対して、より正確な診断や予
防に結び付けることができるようにな
りました。

撮影した画像は、コンピュータ解析に
よりカラー
画像や三次
元画像で表
示でき、患
者さまにとっ
ても、結果
が目で見
解りやすい
検査といえ
ます。



マンモグラフィを移設。 プライバシーをより重視しました。

マンモグラフィとは、乳房のX線撮影で、
視触診では発見できない「小さながん
細胞」も発見可能な利点があります。

この撮影装置を、馬場記念病院では
これまで北館1階に設置してしまっ
たが、この度、南館1階の健診室フロアに
移設しました。また、移設を機に、検
診を受けられる方のプライバシーを考慮
することに重点を置き、よりよい環境
で安心して検査を受けていただけるよ
う整備しました。

日本での乳がん発症者数は年々増加
しています。さらに、乳がん検診受診
率が低いため、死亡率も増加していま
す。しかし、乳がんは早期発見できれ
ば、約95%の方が治癒するといわれてい
ます。早期発見のためには、毎月1回
自己検診を行うとともに、医療機関で
定期的な乳がん検診をお受けになるこ
とが大切です。

なお、馬場記念病院では、マンモグラ
フィは女性の診療放射線技師が担当し
ていますので、安心して検査していただ
くことができます。



地域医療を考えるペガサス情報誌

Pegasus Tsubasa

つばさ 38

2011年夏号

平成23年7月発行特別編集号（通巻38号）

発行人 馬場武彦
編集長 立永浩一
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
発行 HIP コーポレーション

社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

本誌は再生紙を使用しています。

特集1

ペガサスの原点、
カタチを変え新たな挑戦を。
介護療養型老人保健施設「エクウス」と
馬場満記念クリニックの誕生

特集2

医療から、そして看護、介護から。
地域社会を支える人々。

医療は、時代や社会の動きとともに、
求められるカタチが変わります。

地域の皆さまに愛されてきた「馬場病院」も、

これまでの役割を終え、これからは、

介護療養型老人保健施設エクウス、

馬場満記念クリニックとして、

新たな歩みを始めます。

その姿は変わっても、

創始者である馬場満が医師として貫いた

思い、姿勢は変わることはありません。

「すべては患者さまの視点」から見つめていきます。

そしてそこでは、地域における在宅医療の拠点として、

医療機関や介護・福祉機関の皆さまと一緒には、

地域住民の生命を守る、健康をとり戻す、

あるいは新たな生活を考えるなど、

しつかり支えていきます。

ペガサスは、創始者馬場満の意志を忘れず、

これからも歩み続けます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦



社会医療法人

ペガサス